HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌市における中高生の口腔乾燥感に関する調査 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	髙橋, 睦美
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第12601号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65612
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Mutsumi_Takahashi_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（歯学）　　氏　名　髙　橋　睦　美

審 査 担 当 者　　主査　教授　北　川　善　政
副査　教授　山　崎　裕
副査　助教　竹　原　順　次

学　位　論　文　題　名
札幌市における中高生の口腔乾燥感に関する調査

審査は，審査担当者全員出席の下，はじめに申請者より提出論文の要旨を説明しながら，その内容について審査担当者が口頭試問を行った。申請者は論文の概要を以下のように説明した。

口腔乾燥症の主要な訴えである口腔乾燥感は，加齢とともに増加する。このため，中高生といった若年層から口腔乾燥感を自覚する者の割合およびその状態を把握し，早期に対応することは重要と考えられる。本研究の目的は，中高生における口腔乾燥感の自覚者の割合と客観的評価との分析を行い，口腔乾燥感に影響する要因を明らかにすることである。

調査対象者は，札幌市において2012年4～6月の学校歯科健診を受診した中学1年生から高校3年生までの生徒1,305名のうち，自記式質問票に不備な点があった者や矯正装置が入っていた者を対象から除外した1,010名（男子369名，女子641名）とした。
口腔乾燥感自覚者の割合は中学生で男子13.2%，女子17.3%，高校生で男子22.7%，女子17.0%であった。中高生別の男女比較では，口腔乾燥感自覚者の割合に有意差は認められなかった。また，中高生の比較でも口腔乾燥感自覚者の割合に有意差は認められなかった。

口腔乾燥状態の客観的評価(柿木分類の診断結果)は，中高生ともに正常または軽度であった．口腔乾燥感自覚者の割合と柿木分類の診断結果との間には，有意差は認められなかった。

口腔乾燥感の有無を目的変数にしたロジスティック回帰分析の結果，有意な説明変数は「食事を抜く」がオッズ比1.65（$p<0.05$），「10分以内に食事終了」と「ストレス」がオッズ比それぞれ1.67，1.89（$p<0.01$），「鼻づまり」と「口が開いている」がそれぞれオッズ比2.69，2.02（$p<0.001$）であった．口腔乾燥感に影響する有意な項目は「食事を抜く」，「10分以内に食事終了」，「ストレス」，「鼻づまり」と「口が開いている」であった。

以上から，中高生のような若年層において口腔乾燥感自覚者の割合は男女や年齢に有意差はなく，また，口腔乾燥感に影響する要因は咀嚼回数が減少するような食習慣，口呼吸およびストレスである可能性が示唆された。

引き続き，論文内容及び関連事項について，以下の項目を中心に質疑応答がなされた。

１．本研究の特徴について。
２．間食の習慣については問診したのか。今後間食の習慣についても質問項目に加えてみてはどうか。
３．質問票の回答の不備に関して，女性の方が多い理由について。
４．口腔乾燥感自覚者の割合について，男子（中学生と高校生）と女子（中学生と高校生）で比較は行ったのか。
５．柿木分類による診断で，中等度や重度の診断を受けた者はいなかったのか。
６．健診時間（特に柿木分類による診断を行う時期）に関して，時間帯の調整は行っていたのか。
７．「鼻づまり」と「口が開いている」の項目は，分析を行う際に相互に影響しあう可能性はないのか。
８．高校生において，うつ病などの精神疾患を有する者はいなかったのか。常用薬との関係についてはどうか。
９．「1，２回／月」以上を「あり」とした上で，柿木分類による診断と口腔乾燥感自覚者の割合について分析しているが，「１，２回／週」以上や「３，４回／週」以上を「あり」として分析した場合はどうか。

以上の質問に対して申請者から適切かつ明確な回答が得られ，本研究ならびに関連分野について十分な理解と知識を有していることが確認され，本研究のさらなる発展が期待された。

以上のことから，審査担当者全員は，学位申請者が博士（歯学）の学位を授与されるに値するものと認めた。